

復興に自然・文化・歴史という視点を、地域資源・イトヨから考える

オピニオン

復興に向けて様々な取り組みが進められている中、「復興には、地域に根ざした『自然・文化・歴史』という視点を忘れてはならない」と訴え続けている方々がいます。その中の一人が、岩手県大槌町教育委員会事務局生涯学習課長の佐々木健さんで、ご自身も東日本大震災の被災者です。津波で甚大な被害を受けた大槌町を訪ね、地域資源を活かした復興のあり方についてお話を伺いました。

震災前からの取り組み 豊かな地域資源を活かす

岩手県の沿岸域は、山が海に迫る数多くの湾からなるリアス式海岸で知られ、沖合は世界三大漁場の一つと言われる三陸沖。大槌と言えば、やはり漁業が思い浮かびます。

「おっしゃる通り、大槌は水産業を基幹産業として発展した町です。沿岸漁業が中心ですが、サケの孵化事業が1909（明治42）年に始まり、岩手県内では2番目に古い歴史があります。ただ、大槌の未来や地域づくりを語るのであれ



大槌川を遡上するサケ。堤防からその姿がはっきりと見える

ば、海だけではなく、その他の地域資源に注目しなければなりません。例えば、『湧水』や『イトヨ』等の自然、井上ひさしさんの『ひょっこりひょうたん島』のモデルになった蓬萊島等の文化、そして伊能忠敬と大槌の関わりといった歴史……、そうした地域資源を積極的に活かす必要があると考え、震災前から取り組んできました」

イトヨが教えてくれた 大槌の素晴らしさ

地域資源の中でも、イトヨという淡水魚に注目したのはなぜでしょう？

「大槌はリアス式海岸に面し、平地も狭いのですが、同様の他の地域とは異なり、地下水が豊富です。地下水は『湧水』や『自噴井』という形で我々の生活や自然環境に大きな恵みをもたらしてきました。その象徴となるのが、湧水を源とする源水川に棲む『イトヨ』なのです。経緯を少し詳しく説明すると、99年に総合研究大学院大学の研究会が大槌町で開催されました。秋篠宮殿下も研究者の一人

Opinion

として参加されましたが、ここで源水川のイトヨの存在が指摘され、それまで我々が『ただの小魚』と思っていたのが希少な種だと分かったのです。その後、イトヨ研究の第一人者である岐阜経済大学の森誠一教授の調査により、大槌のイトヨは「淡水型」であることが証明され、2001年には大槌で『淡水型イトヨシンポジウム』が開催されました（参加者約800名）。07年に、源水川の淡水型イトヨと生息地を町の天然記念物に指定し、その後、イトヨ観察会の開催や町民による生息地の環境保全活動へと発展してきました。我々にとってイトヨは自然環境のシンボルなのです」

震災後のイトヨ、そして課題

大槌の自然環境のシンボル・イトヨは、震災後、どうなったのでしょうか。「いたんです、イトヨが。11年5月26日、秋篠宮ご夫妻が隣の山田町と大槌町にお見舞いに来られました。その2日前に関係者と一緒に源水川で見つけたのです。秋篠宮ご夫妻も、お帰りの際に、視察さ



淡水型イトヨが生息する源水川の
上流部。下流部にはサケの
孵化場がある



かつては150近く確認されていた自噴井。瓦礫を除去した市街地では、今なお湧き続ける自噴井が見られる

して、佐々木課長はこう付け加えました。「復興がかなったら、蓬萊島を町の名勝に指定したいですね。間違いなく、復興のシンボルになるでしょう。これからも、地域のアイデンティティーである『自然・文化・歴史』にこだわり、復興を進めていきたいと思っています」



市街地の（湧水のある）水たまりで発見されたイトヨ

地の水たまりや水路で、新しいタイプのイトヨ（遡河型）を確認。これは、地元の岩手日報社会面トップとNHKの全国放送でも報道されました。森教授は『新しい水域で新たに確認されたイトヨは遡河型イトヨであり、しかも、この新規集団には、源水川の淡水型が移動して交雑が生じている可能性が大きいことが判

多くの支援に感謝 「蓬萊島」を復興のシンボルに

震災直後の支援の中にも湧水やイトヨに関連したものがありません。「今回の震災では、実に多くの方々からご支援をいただきました。湧水つながりで言えば、東京都東久留米市、愛媛県

西条市、山形県遊佐町の皆さんには支援物資やボランティア等、いち早く支援していただきました。イトヨでお世話になっている森先生も支援の会を立ち上げてくださり、日頃の取り組みで知り合った皆さんが、こうして支援してくださったことに本当に感謝しています」

インタビュー後、佐々木課長に町内を車で案内していただきました。蓬萊島を望むため赤浜地区に向かう途中、佐々木課長が「もうすぐ昼だね。ちよつと聴いてみようか」と車を止めると、防災用スピーカーからあのメロディーが流れてきました。ジャズピアノリストの小曾根真さん演奏による「ひょっこりひょうたん島」のテーマ曲です。「苦しいこともあるだろうさ、悲しいこともあるだろうさ、だけど僕らはくじけない。泣くのはいやだ。笑っちゃお……」。そ



津波で流出した蓬萊島の大槌港灯台は昨年12月13日に再建、1年9カ月ぶりに再点灯された。灯台のデザインは町民の応募作品から選定したもの

大槌町 概要



- 被災状況
- ・被災前の人口：16,058人（2011年2月28日現在）
- ・死 亡 者：800人
- ・行方不明者：455人
- ・家屋の全壊・半壊等：3,978棟（全家屋の59.6%）（出典：大槌町東日本大震災津波復興計画）
- * 2013年1月31日現在の人口13,024人、世帯数5,454戸

特集

東日本大震災から2年 復興への取り組み

■花言葉は「逆境に立ち向かう」

佐々木健さんが館長を務める大槌町立図書館の「利用者カード」には、ひょっこりひょうたん島に自生するキク科の多年草「ハマギク」の写真が使われています。偶然でしょうか、花言葉は「逆境に立ち向かう」です。



写真提供：佐々木健氏

■イトヨとは

トゲウオ科イトヨ属。北アメリカ、ヨーロッパ、日本の北中部を含む極東アジア等北半球に広く分布する冷水性の魚類。その分布はサケ科魚類とほぼ同様。1980年代後半から本州各地で、人間活動の影響によりイトヨが絶滅または激減した場所に、湧水を復活させる事業が実施されている。イトヨはその生活史から淡水型と遡河型に分けられる。淡水型は一生淡水域で過ごす、遡河型は春に海から河川へ遡上、繁殖後に親は死に、その稚魚は降海し成長する。源水川に生息するイトヨは、降海しない淡水型に分類されている。

※参考：森 誠一「郷土力を培う淡水魚の保全—大槌町のイトヨから—」（秋道智彌編『大槌の自然、水、人 未来へのメッセージ』に所収）